

ベルリン滞在記 (その 1)

このコラムでは、これまで筆者が外務省の在外公館に勤務した在勤地について、それぞれの国や都市の事情について、表面的な内容にはなりますが、地理、歴史、社会制度や文化面などを切り口として、生活体験も踏まえながら掲載してきました。

今回はドイツの首都ベルリン在勤当時について、ウクライナ戦争や気候変動などによって大きく変貌しつつある昨今の状況とも対比させながら振り返ります。

ドイツへの出発

ベルリンの在ドイツ日本国大使館に着任したのは、2008 年 8 月末でした。欧州での勤務は、英国、ギリシャに次いで 3 度目ということになりましたが、それまでドイツ語圏に勤務した経験はなく、ましてやドイツ語のバックグラウンドもまったくなかったので、戦々恐々といった面持ちでの赴任となりました。

赴任に当たっては、このコラム第 50 回の“家のはなし”にも書きましたが、横浜の自宅を空き家にしたまま家族 4 人での出発、さながら一家で遅い夏休みの海外旅行かといった趣でした。それまでの赴任や転勤では、引っ越しの都度、家具や食器、寝具や衣服など家財道具の一切合切を持ち歩くことを余儀なくされていたので大掛かりな引っ越し作業にエネルギーを費やしていましたが、ドイツへの赴任は自宅があったおかげで引っ越し荷物も必要最小限で済み、身軽な出発となりました。

長旅の末に

近年、欧州地域にも温暖化の波が押し寄せ、特に昨年と今年の夏は欧州のほとんど全域が熱波に見舞われており、ギリシャやスペインなどでは大規模な山林火災が発生したと報道されていましたが、ドイツも熱波の影響からは逃れられなかったようです。かつては、エアコンなどとは無縁の生活だったベルリン市民も、今年は猛暑を凌ぐのには四苦八苦だったのではないかと想像しています。

翻って、15 年前の 2008 年、ドイツに出発した 8 月末日の日本は厳しい残暑で気温は

30℃以上。他方、到着したベルリンは夏時間を採用していることもあって午後8時過ぎまで明るかったにもかかわらず外気は肌寒く、ジャケットなしでは我慢できないほどでした。考えてみれば、ベルリンの緯度は北緯 52.5 度、欧州大陸の北に位置する英国ロンドン（北緯 51.3 度）よりも北で、樺太の北部とほぼ同緯度ですから夏でも涼しいはずです。

ベルリンへは、成田からフランクフルトまで ANA の直行便、そこからルフトハンザの国内線へ乗換えて計 14~15 時間のフライトでした。到着して驚いたのは、大国ドイツの首都にもかかわらず空港があまりにもこじんまりしていたことです。当時、ベルリンの玄関口であったテーゲル空港は市の中心部から 7~8km、車で 30 分程度の至近距離にあって便利な空港ではありませんでしたが、首都の空港としては滑走路の規模と本数、ターミナルビルの規模などの面ではそのキャパシティが限られており、就航便は欧州の近隣国との国際路線と国内便に限られていました。ちなみに、このテーゲル空港は第二次大戦の終結直後に西ベルリンに入る陸上交通がソ連によって封鎖されたこと（ベルリン封鎖）で“陸の孤島”のような状態に陥ったため、西側からの援助物資の空輸を可能にすることを目的に 2,500m 滑走路を持つ空港として突貫工事で建設されたものでした。当初は、救援物資輸送などの軍事目的でしたが、その後民間航空機の乗り入れにも開放され、東西ドイツの統一とその後の首都移転によって文字通り首都の玄関口となったものです。2020 年には、郊外に新空港が建設されたことに伴って同空港は閉鎖されましたが、新空港の開港までには紆余曲折がありましたので後述します。

とにかく、長いフライトの末に到着するや早速長期滞在者用のサービスアパートにチェックインを済ませると、家族全員長袖に着替えて、前任者夫妻とともに引継ぎを兼ねた夕食に出かけました。EU 諸国はサマータイムを採用しており、8 月末の時期の戸外は遅くまで明るく、訪れたレストランでは多くの客が外気温 20℃にも満たない中、テラスのテーブル席で夜遅くまで談笑していたのが印象的でした（もっとも、夏場に市民がテラスで飲食をするのはベルリンに限らず欧州各地で目にする光景ですが…）。

サービスアパートに滞在中だった 8 月末から 9 月にかけての気候は、晴天の日は日中汗ばむくらいに気温が上昇しますが夕方以降は急激に気温が下がります。また、曇りや雨の日はコートが必要でしたので、着任直前まで気温 30℃越えの日が続いていた猛暑の日本から到着した身としては体調管理が難しく、日々の服装にも困った記憶があります。

戦後のベルリンの歩み

現在のベルリン市は、ドイツの首都であると同時にそれ自体がドイツに 16 ある連邦州の一つとして存在している都市州です。地理的には、ポーランド国境から僅か 60~70 km とドイツの中ではかなり東部に位置しています。面積は、892 km²（東京 23 区の 1.4

倍強)、人口は約 361 万人 (いずれも在日ドイツ大使館 HP より) ですので、東京と比較した人口密度は 1/3 以下です。市内の繁華街は、ニューヨークのマンハッタンや東京 23 区のように高層ビルが林立することもなく、低層の建物で統一されています (最近では、高層ビルもいくつか建設されていますが、基本的には街の景観を守るための高さ規制があると聞いています)。また、市内の至るところには森や公園があり、隣接するブランデンブルグ州境周辺には広大な森林が広がっています。市の中心部、日本大使館にも隣接しているティアガルテン公園はロンドンのハイドパークやNYのセントラルパークのような芝生がメインの公園というよりは、巨木がうっそうと生い茂るまるで森のような様相の公園です。また、住宅街は東京のような高層マンションビルがひしめき合っているようなこともなく、周囲は木々に囲まれ緑豊かな環境の中で人々はゆったりと過ごしているように見受けました。

第二次大戦以前も、ベルリンはドイツの首都でしたが、戦後のベルリンの歩みは平坦なものではなかったように思います。筆者の拙い理解になりますが、東西統一までにはザッと以下のような変遷がありました。

戦後のドイツ (1945 年 5 月に降伏) は、その後数年間にわたり米英仏ソの連合国による分割統治が続きました。その間に、米英仏の西側陣営とソ連のイデオロギー対立が鮮明となり、いわゆる冷戦が始まったことをきっかけとして、1949 年に東西に分断国家が成立し、東部地域は東ドイツとして旧ソ連陣営の一国になり、米英仏が統治していた西部地域は西ドイツ (ドイツ連邦共和国) として西側陣営に属することになりました。他方、ベルリンはソ連が占領する東部地域の中にあつたものの、米英仏ソの間で別途の合意 (ポツダム協定) により分割統治が行われていたわけですが、西側陣営のドイツ統治政策に異を唱えるソ連が、米英仏が統治する西部地域からソ連が統治する東部ドイツ地域を経由してベルリンに入る陸上交通 (鉄道、道路) がすべて封鎖される事件 (ベルリン封鎖: 1948 年) をきっかけに、ベルリンは西側 3 か国の統治地域 (西ベルリン市) とソ連統治地域 (東ベルリン市) で東西に分断されるに至りました。ちなみに、ベルリン封鎖の間、西ベルリン市民を守るために米英軍が中心となって大規模な物資の空輸作戦 (1948 年 6 月から 49 年 5 月) が展開されたことはよく知られています (上述のテール空港がその役割を担った)。

その後、ソ連による封鎖は解除されたものの、ベルリン封鎖を経て東西の分断は決定的なものとなり、49 年に東西ドイツ国家がそれぞれ成立したことに伴い、ベルリンも東ベルリン市が旧東ドイツの首都になった一方で、西ベルリンは東ドイツの中における西側陣営の飛び地として法的には西側 3 カ国 (米、英、仏) が統治する占領地域となり、実質的には (行政権を西ドイツが有する) 西ドイツ領西ベルリン市として 1990 年の東西統合まで存在し続けました。

ベルリンが東西に分割された当初、東ベルリン市民は 3 か所あつたチェック・ポイントを経由すれば自由に西ベルリンへの往来が可能だったと聞きますが、東ベルリンから

西ベルリンを経由して西ドイツ領へ脱出する市民が大量に発生していたことを問題視した東ドイツ政府は、1961年に東西ベルリンの境界線上に壁を建設（いわゆるベルリンの壁）、市民の脱出ルートを遮断するに至ったということで、ベルリンの壁は東西冷戦の象徴だったと言われていています。その後、（詳細は省きますが）1980年代末期のハンガリー、ポーランドなどの東欧諸国における民主化の波が東ドイツにも押し寄せ、東ドイツ政府は1989年11月に東西の境界線を事実上開放し、ベルリンの壁は崩壊しました。翌1990年、ドイツは東ドイツが西ドイツ（ドイツ連邦共和国）に統合される形で再統一、ベルリンも東西が統合され、91年には統一ドイツの首都と定められました。

なお、現在の在ドイツ日本大使館は1991年に旧在東ドイツ大使館が在ドイツ大使館に統合、99年には在ベルリン総領事館が廃止されて在ドイツ大使館に統合され、旧西ドイツの首都ボンからベルリンに移転して現在に至っています。

つづく

（公財）栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人（略歴）

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。